

チェルノブイリ通信

2005年9月20日

No. 65

発行 チェルノブイリ支援運動・九州 事務局

連絡先 福岡県遠賀郡水巻町下二西3-7-16(株)ウインドファーム内
TEL・FAX 093-203-5282

E-mail jimur@cher9.to

URL <http://www.cher9.to/>

郵便振込口座 01770-1-65328 チェルノブイリ支援運動・九州



ついに念願叶って走り始めた雪だるま2号。
チェルノブイリ支援の期待と夢を乗せて走る、走る。

* 鼎談・2005年、チェルノブイリ調査隊報告

* ベラルーシへの旅、医学生坂井さんからの報告

* 今後へつながる収穫、小山さんが得た出会い

* ベラルーシ、思い出深いシーンの数々

* 甲状腺をめぐるベラルーシの現状
事故から20周年を迎えて

* 特別寄稿 ベラルーシに暮らして

* 第5回、ベラルーシについて学んでみよう

* チェルノブイリ支援運動・九州活動報告

鼎談・2005年、チェルノブイリ調査隊報告

忘れ得ぬ人々との喜怒哀楽

ベラルーシからの帰り道で話したこと

小山浩一（チェルノブイリ支援運動・九州 運営委員）

山田英雄（医療通訳・コーディネーター）

矢野宏和（チェルノブイリ支援運動・九州 代表）



2005年、8月16日。全ての日程を終え、夏のチェルノブイリ調査隊一行を乗せた飛行機は、ミンスクの地を離れた。私の両脇では運営委員の小山浩一さんと、医療通訳コーディネーターの山田英雄さんが、はやくもウトウトしている。旅の疲れもたまり、しかも早朝の便だから無理もない。見下ろす大地は朝一番の陽光に照らされている。

いつもそうなのだが、飛行機が離陸し、ベラルーシの大地から身体が離れると、安堵のため息がもれる。空の向こうの日本の山々を想うと心が安らぐのだ。

美しい自然を誇るベラルーシには、山がない。山国で育った私には、それが思いのほか辛い。大地に空がべったりと張り付いているこの国にいますと、自分の居場所があやふやになってしまい、広大無辺な真空地帯に投げ出されたような気持ちになる。

そんな場所において、自分のいる場所を明確にしてくれるのは、この国に生きる人々に他ならない。逢うべき人がいればこそ、私たちはチェルノブイリ支援という縦糸を通すことができ、進むほどにこの地に生きる人と交差し、そこから新たな取り組みを構築していける。この確かな人のつながりは、支援運動の継続に欠かせない。

10年近くそうした活動を続けていれば、出逢った人それぞれが、その時間を積み重ね、移り変わる人生の営みや、その成長ぶりが見えてくる。そこには幸せなこともあれば、辛いこともあり、思わず「人生とは・・・」などと答えようのない問いを考えってしまう。

今回の旅を通して出逢った人、重ねた対話、新たな事実。それを独りで考えていても埒があかない。誰かと一緒に振り返りたいと思った私は、すでに眠りに落ちてしまった小山氏と山田氏の肩を叩いて、「さあ、旅を振り返って反省会をしましょう」と声をかけた。

（構成・矢野宏和 チェルノブイリ支援運動・九州代表）

リウドミラ・ウクラインカさん 母として生きる幸福を得て

矢野「母親になったウクラインカは、とても幸せそうでした。」

山田「ウクラインカのように着実に成長していく人材は、チェルノブイリの支援をしていくなかで重要です。自ら甲状腺の手術を受け、自立して、結婚し、出産し、心理カウンセラーとして現地の人々が、現地の人をサポートしていくということを実践している。そして、この度、お母さんになる幸福も得た。そうした姿は、同じ病で傷を負った人にとって励みになるはず。」

小山「日本にいる私たちも彼女の生き方から学ぶことが多いよね。」

山田「まさにそう。以前、事務局長を務めていた谷口さんは、今、子どもと自然を相手にした仕事に取り組んでいるけど、この支援活動を通して、ウクラインカから学んだことって多分に影響していると思うよ。」

矢野「ウクラインカには、苦難を乗り越えて得た強さがありますね。」

小山「そして、その苦難というのは今も続いていると思う。以前、ウクラインカからのメールに、出産に際して幾つもの病院に通う辛さや、甲状腺を手術したことからの生じる不安が書かれてあった。生まれてきた赤ちゃんにも何らかの影響があるかもしれない。」



リウドミラ・ウクラインカとの出会いから、7年の月日が過ぎる。初めて会ったとき、心理学を学ぶ学生だった彼女はこう自己紹介をした。「自ら甲状腺の手術を受けた体験を活かして、子どもたちのこころのケアに取り組みたい」その後、私たちは甲状腺ガンセンターで手術の実施を宣告されてから始まる怖ろしかったことを私たちは知った。それからともに過ごした7年間。私たちは彼女が夢を一つひとつ実現させていく姿を見てきた。心理カウンセラーとして女性や子どもへの心のケアに臨み、チェルノブイリ支援運動・九州の検診においても子どもたちにかウンセリングをしてくれる彼女は、今でも私たちの支援活動にとって不可欠な存在だ。そして今年、ついに母となる夢を叶えたリウドミラ。今では、育児に悩むお母さんたちを集めてサークル活動をしている。

山田「甲状腺が摘出された状態で出産するということは、確かに大変なことなんでしょう。母体にとっても子どもにとってもね。ウクラインカと同じような境遇にある女性が数多くいることを忘れてはいかんね。」

矢野「ウクラインカは今、子育てに不安を持つお母さんたちのグループを作って活動しているそうです。」

山田「ウクラインカは甲状腺を手術したときも、そして出産したときも、とても辛い経験をしているけど、その経験を必ずみんなのために活かそうとする。本当にすごい女性だ。私たちも彼女に出会えたことに感謝しないとね。」

ありがとう、ロマノフスキーさん ベラルーシ赤十字総裁を退任されて

矢野「ベラルーシ赤十字総裁のロマノフスキーさんが退任されました。山田さんは彼とは長い付き合いでしたよね？」

山田「15年になるかな。91年に彼がベラルーシ赤十字の総裁になってから、随分医療支援の活動がやりやすくなったね。それまで横行していた不正も随分減った。」

矢野「山田さんが現地で医療支援のコーディネイトをするときは、ベラルーシ赤十字の存在は心強いのですか？」

山田「医療支援においては、派遣団が無事に帰ることが何よりも大切だからね。昔は治安も悪かったから、現地での安全な宿泊先や、訪問先の手配をしてくれるベラルーシ赤十字は有り難かった。」

小山「新しい総裁のジャルコフさんも、温かい感じの人でしたね。」

矢野「支援運動・九州の検診活動もよく理解してくれて、今後も変わらない協力を約束してくれました。」

小山「今回、ベラルーシ赤十字の体制が変化する時期に訪問できたことは本当によかったね。11月にはまた甲状腺の



これまで15年間、ベラルーシ赤十字の総裁を務めてきたロマノフスキーさんが今年7月、退任した。総裁としてチェルノブイリ支援の陣頭指揮に当たり、私たちチェルノブイリ支援運動・九州にとっても掛け替えのない仲間だった。雪だるま2号の購入に際しては、150万円の税金の問題を解決し、甲状腺の検診においては、円滑に医療活動ができるよう準備をしてくれた。後任には、ジャルコフ氏が就任。チェルノブイリ支援運動・九州が検診を行っているプレスト市の出身で、私たちの検診活動についてもすでに理解されており、これまでと変わらぬ協力を約束してくれた。こうした引継ぎも滞りなくしてくれたロマノフスキーさんに改めて感謝の念を捧げたい。

検診が行われるけど、これで安心して取り組める。」

矢野「新しく総裁になったジャルコフさんが、支援運動・九州による検診が行われているプレストのご出身ということも心強いですね。」

山田「プレストでの検診は現地でも高い評価を得ているし、現実にも甲状腺ガンという不安を抱え、確かな検診を必要としている人がたくさん待っている。現地での高い評価は、私たちへの期待でもある。今後も継続していくべき活動だね。」

リュドミラ・チュプチュクとの出会い 教師として、チェルノブイリを伝えていく

矢野「小山さんは、教師という共通点を持つチュプチュクと初めて会って、どんな印象を持ちましたか？」

小山「彼女が言った言葉のなかでとても印象に残ったことがあります。それは、『チェルノブイリを伝えていくことは、私の義務です』という言葉。これはすごいことだと思います。今の日本の先生でも、あんなふうには、自分が子どもたちに伝えることをはっきりと伝える人はどれだけのいるでしょうか。」

山田「それだけ、まだチェルノブイリという現実が実生活のなかに強く残っているということもあるね。チュプチュクのお母さんや妹のターニヤの身体の調子が悪いことを、チェルノブイリの原因ではないかとチュプチュクは心配していた。」

矢野「今後、ベラルーシと日本の中で学校交流などでできそうですか？」

小山「うーん。そうしたいけど、チュプチュクは専門学校の教師ということなので小学生同士の交流は難しいそう。でも、ナガサキやヒロシマの資料など授業で使っている資料など使っていたら、もう少し言っていたら、もう少し言いたるところから協力していければと思います。」

山田「まあ、何事もじっくり、ゆっくり時間をかけて取り組んでいかないとね。日本の原爆の問題、ベラルーシのチェルノブイリ、総じて核と

いう問題を一緒に考えていくことは、これからずっと必要になる。きつといい交流ができると思うよ。」

矢野「将来は、故郷の小学校の教壇に立つてもらえたらいいなってチュプチュクのお母さんは言っていたけど、チュプチュクはミンスクで暮らしたいようですね。」

山田「そりゃあ、彼女もまだ若いし。これだけ都会と農村で差があると、都会に住みたいというのは当然だろうね。」

小山「何はともあれ、教師の道を歩み始めたチュプチュクの今後をじっくりと見守っていききたいです。」



リュドミラ・チュプチュクが作文集「私たちの涙で雪だるまが溶けた」の中で「私は生きる」という作文を書いたのは、16歳の時。愛する大地への哀しみをあますことなく伝えたいという夢よりも教師になる道を選んだ。

ミンスク教育大学を卒業し、24歳になる彼女は、今年からロシア文学の教師として教壇に立つ。ベラルーシでもチェルノブイリという言葉は忘れられようとしている重要なものになる。原発や核兵器、ウラン弾、核をめぐる危険が絶えないこの世界において、彼女が教師としてどんなメッセージを伝えていくのか。彼女の今後に期待したい。

の危険が絶えないこの世界において、彼女が教師としてどんなメッセージを伝えていくのか。彼女の今後に期待したい。

ブレストの医師たち 甲状腺の検診にも取り組む

矢野「8年前、ベラルーシでの甲状腺ガンの検診活動に取り組み始めた時、山田さんが何度も繰り返し言っていたのが、『最終的には、現地の医師だけで検診ができるようにしないとイケない』ということでした。ブレストの医師たちが積極的に参加してくれるようになって、その構想が現実になってきましたね。こうなることは、ある程度、予想していたのですか？」

山田「いや、もう予想以上というべきでしょう。ブレストの医師たちは、普段から、学校や病院に泊まりながら各地方で検診を行い、その数は年間1万5000人にもなる。それだけ多くの患者の中からガンの疑いのある人を選んで、日本の医師による精度の高い検診を行うというのは、効率の面では理想的な形。さらに、アルツール医師たちは、これまで日本の医師から吸飲穿刺による細胞診を学び、自ら精度の高い検診を行い、甲状腺ガンを自分たちで発見できるようになった。」

矢野「この一年間で、ブレスト・ゴメリ・モグリフの汚染地域において、1

チェルノブイリ支援運動・九州の検診活動の拠点となるブレスト内分泌診療所の医師。彼らの技術を学ぼうとする姿勢が、きょうまで検診活動を継続させてきた源にあるといい。



医療支援の現場は、よほど気を付けないと善意の押しつけに終始し、継続なく終わってしまう。技術を伝えたいという想いと、学びたいという医師と。その双方の対話がなければ持続可能な支援活動は成立しない。アルツール医師は言う。「1年間で85名の甲状腺ガンを発見することができました。これは、日本の医師から学んだ検診技術のおかげです」

早期発見、早期治療の実現を目指して、これからも、この貴重な仲間たちとの検診活動は続いていく。

15名の患者から甲状腺ガンが見つかり、そのうち85名は、ブレストのアルツール医師たちが発見しています。アルツール医師たちのような存在は、他の医師たちにもいい影響を与えますね。」

山田「そうだね。自分たちにもできるんだという気持ちになると思う。そして、今度はアルツール医師たち自身が、確かな検診の技術を伝えていくことになると思う。」

ナターシャさんたちのこと 工房「のぞみ21」のこれから



工房のぞみ21の作業風景

矢野「ナターシャさんに『ゴメリに住んでいて、放射能の影響は大丈夫なのか』と聞かれて、山田さんはどうお答えになったのですか？」

山田「それは、もう確かなことは分からないと答えるしかなかった。いい加減なことは絶対に言えない。実際、チェルノブイリに関して正しい情報というのはほとんど伝えられていないのが現実。IAEA（国際原子力機関）がチェルノブイリの被害者の数は4000人と発表した時、『それは少なすぎる』と猛反発を受けたこともある。ヒロシマでも原爆から60年経つけど、放射能の被害の正しい情報というのは、まだ明らかになっていない。」

小山「ベラルーシから帰ると教え子から、放射能は大丈夫だったかと聞かれる。けれど、その問いにも答えられない。目に見えない放射能の被害の様子を伝えるのは、時

の経過とともにこれからもっと難しくなっていく。」

矢野「確かな情報がないために、精神的なストレスを生じさせていますよね。ナターシャさんのような不安を感じている人は多いと思います。」

山田「その背景には、チェルノブイリ原発事故後、ソ連が崩壊して、社会的、政治的混乱が生じ、それまでの医療システムが一度崩壊してしまったという状況がある。だからベラルーシでは、今でも満足な検診もできていない状態が続いている。ナターシャさんの息子オレグ、娘ニーナの死も、もっと早期に検診が行われていればと、思う。」

矢野「いろいろな不安を抱えて、ナターシャさんとステパンさんは、まだ5歳のナターリヤを育てていかなくはなりません。それは体力的にも経済的にも大変なことだと思います。ナターシャさんは教会の神父に『この世の中、悪いことをしている人はたくさんいるのに、どうして自分たちはばかりにこんな辛いことが降りかかってくるのか』と聞いたそうです。納得できる答えは得られなかったそうですが・・・」

山田「政府からナターリヤへの援助はどれくらい払われるのかな？」

矢野「40ドルって言うてました。でもベラルーシも最近物価が上がってますからね。ナターシャさんたちが安心して生活していけるようにするには、何が必要何でしょうか？」

山田「やっぱりお金でしょ。ただ、単にお金を渡すのではなくて、私たちがナターシャさんが運営する工房「のぞみ21」の作品を買って、日本の支援者に伝えていくようなお金の循環が大切だね。」

矢野「チェルノブイリ支援運動・九州の事務局が中心になって、ナターシャさんから教わった料理のワークショップやマトリョーシカ人形の絵付け会などを催していますが、そうした活動も今後、継続させていくことが必要ですね」

小山「何より、人のつながりが大切になってくると思う。今回、水俣病の被害を受けている人で運営されている『ほっとはうす』での取り組みをナターシャさんに伝えましたが、ナターシャさんはとても真剣に聞いてくれました。将来、互いに励まし合っていけるような交流を作っていきたいと思います。」



工房「のぞみ21」を運営するナターシャさん、ステパンさん夫妻にとって、「家族」とは何を意味するのだろうか？最愛の息子オレグは20歳でこの世を去り、そして今年、長女のニーナを失った（享年三十歳）。オレグの死は、甲状腺ガンが肺に転移したのが原因で、それは紛れもなくチェルノブイリ原発事故が引き起こしたものだ。ニーナは胃ガンを患っての死。それは、チェルノブイリとの因果関係は立証されないが、ナターシャさんたちの心の奥底には、「チェルノブイリ」という言葉は今も居座り、何か事あるたびに疑心暗鬼を生じさせる。「ゴメリに住んでいて大丈夫なのか？」と

いう疑問はいつも浮かんでくる。

遺されたニーナの娘、ナターリヤに寄せる想いも、ニーナの「忘れ形見」として愛おしむほどに、「チェルノブイリ」という不安は一層深まる。また失うのではないかという怖れは、いつまでもなくなりません。汚染の強いゴメリを離れてミンスクに移ろうかとも考える。でも、そうしたら工房「のぞみ21」の運営はどうなるのだろうか？

幾つもの不安と疑問が押し寄せるなか、ナターシャとステパンと、ナターリヤは家族としてこれからも生きていく。

2005年夏にベラルーシで見たこと、聞いたこと、感じたこと

山口大学医学部 坂井 英生

今年の夏、私は再びベラルーシの土を踏んだ。「再び」というのは、以前にもこの国を訪れたことがあるからだ。今から9年前の高校1年の夏、私はまだ15歳だった。当時はまだ将来のビジョンなどほとんど何も定まっておらず、ただ両親の勧めがままにチェルノブイリ支援運動・九州が企画したスタディーツアーに参加することになったというのが真相だった。

だが、きっかけはどうあれその旅に参加したことで私は様々なことを経験し、多くのことを学ぶことができた。そして多くのすばらしい方々と出会うことができた。助教の地位を捨てて当時日本から医療活動にいられていた菅谷昭先生もその一人だ。この旅での体験もきっかけのひとつとなって、私は医師になりたいと思うようになった。

医学生となった私は、日々の授業と実習の繰り返しの中「これでいいのだろうか」という疑問を常に抱えていた。人間の体の構造や機能、病気などはある程度はわかった。だが、肝心の「命」が見えてこない。患者が肉体的、精神的にどのような悩みを抱え、周りにどんな助けを求めているのか、私はそれが知りたかった。そんなときに、以前お世話になった同支援運動・九州のことを思い出し、国際医療・保健にも興味があったこともあり、今回再びツアーに参加することになったのだ。

今回の旅もまた内容の濃いものとなった。いまだに多く発見される甲状腺癌の現状を現地医療スタッフから聞き、病院で偶然にも首筋に

痛々しい手術跡の残る青年と出会うことで、チェルノブイリ事故がもたらした生の現実を実感することができた。

また、汚染地域の方の「これからもここに住んで本当によいのですか」という質問には、19年前の事故は今も現実として人々の生活に、そして心の中に確実に存在しているということを強く意識された。同時に、会う人と会う人が口々に「ヒロシマ、ナガサキ」と言うことで、決して他人事ではないのだということに改めて感じた。

国際医療のあり方については大いに考えさせられるものがあった。現在世界中に数えきれないほどの医療支援団体が存在するが、中には注目の集まる地域（たとえば今のイラクなど）を次から次へと渡りあるくような団体も少なくな

い。加えて、むやみに高額な医療機器を現地のニーズも考慮せずに援助した挙句、結局ほこりをかぶっているような例も多くあると聞く。そんな中、同支援運動・九州が一貫してチェルノブイリ事故の被災者のために限られた予算内で適切な支援をおこなっていることに改めて気づいた（今回日本からの支援物資としてもって行った縫合糸やプレパラートは決して高額なものではないが、現地では大変感謝されていた）。

物資の支援のみならず現地の医療スタッフを育てることも支援が根付くためには重要なことであるが、移動健診チームのリーダーであるアルツール医師と出会いその柔和ながらも決意に満ち溢れた人柄に触れたことで、同支援運動・

九州の活動が彼の地に確実に根付きつつあることが実感できた。

顕微鏡をはじめとする医療機器がまだまだ足りないことや支援団体どうしの連携がやや欠けていることなどの問題はあっても、一歩一歩目の前の問題を解決していけばいつか未来は開けるのではないかと漠然とはあるが思った。今回の旅もうひとつ忘れられない出来事は、前回のホストファミリーと再会することができたということだ。みんな元気で私のことを覚えてくれて、夕食では久々の再会話で大いに盛り上がった。ただ、食卓の上のキノコ料理を食べようとしたときにふと、ここは高濃度放射能汚染地域なんだ、目に見えない放射線がこの家族は今も確実に心と体が傷つけられているんだと、そう感じた。



9年ぶりの再会を果たした坂井さん



チュプチュクと今後の取り組みについて語る小山さん



小山浩一（中津江小学校教諭）
（支援運動・九州 運営委員）

事故から19年が過ぎ、チェルノブイリの悲劇は次第に忘れられようとしています。そのことは、現地の被災者にも支援する私たちにも厳しい現実です。もっと多くの人にチェルノブイリの今を伝え、支援の輪を広げていくことは支援運動の大きな課題です。とくにこれからを担う子どもたちに伝えることは学校に勤める私の義務だと考えています。

しかし、昨年のスタディツアーから帰り学校で子どもたちに語る中で、被災の現実を伝える難しさを強く感じました。ベラルーシのどこにも放射能の影も音も臭いも味もないのです。子どもたちは「先生、放射能にさわった？」「食べ物は大丈夫だった？」などと聞いてきます。実際、被災の姿は主に医者データのとしてしか伝わってきません。

そんな中で今回、数少ないながら「現実」に接することができました。一つは、ミンスクに検診に来ていた若者アンドレイの首に残る甲状腺ガン摘出手術の痛々しい傷跡。そしてゴメリ市の工房『のぞみ21』のステパンさんのお話。「息子オレグを亡くし、今年娘ニーナを胃ガンで亡くし、残された孫のナタリアに今後どんな影響が出てくるかわからないので移住

も考えている」と言わせるほどの精神的なトラウマ。さらに、この9月から教師として仕事を始めるリユドミラ・チュプチュク。彼女との交流が私にとって今回の大きな目的でしたが、その彼女からお母さん、妹の体調不良への心配も聞かされました。目に見えない放射能は、様々な形でまだまだ多くの人の体と心を冒し続けています。これから計画するあちこちでの報告会の中でしっかりと伝えていきたい「現実」です。

ほかに、今回の大きな成果だったことをお伝えしましょう。とくに教育の面で今後ベラルーシと日本の間の大きな交流に発展していくだろう出会いがいくつかありました。

成田の出版の前日、東京で念願だった演劇を見ました。劇団地人会の朗読劇『この子たちの夏』です。渡辺美佐子さんなど有名な女優さんたちが原爆の被災者の詩や作文を朗読する劇です。終了後の女優さんたちとの交流会で、学校での平和教育の取り組みとベラルーシへの支援の旅について語りました。終わってロビーで売られているものの中にロシア語版の『この子たちの夏』のシナリオが売っていました。私の発言を聞いていたスタッフの方が、「どうぞベラルーシへ持って行って下さい。」とただでくれました。教師となるチュプチュクへの最高の土産ができました。

そのチュプチュクとは、彼女が『わたしたちの涙で雪だるまが溶けた』の中で自然のすばらしさを讀んでいた彼女の故郷グルシコピッチ村で語り合うことができました。これからお互いの授業実践を伝え合って行きたいと思っています。

もう一つ、うれしかったこと。8月10日、ミンスクのホテルに支援運動・九州が資金援助している現地NGO『コンフィデンス』のイリーナさんと娘さんが来てくれました。イリーナさんも教師。昨年、少し教育の話も交わしています。8月9日の長崎での平和祈念式典の様子がベラルーシでもニュースで流れました。イリーナさんからの突然の依頼。

「こちらの子どもたちに広島・長崎のことを教えたい。ビデオ等のいい資料があれば使わせてもらいたい」。平和授業に取り組んできた私は、数え切れないほどビデオやその他の資料をもっています。次回、届けることを約束しました。平和教育の面での交流も進めていきたいと思っています。また『この子たちの夏』ロシア語版のコピーが、チュプチュクからイリーナさんへ届くようにしようと思っています。

8月6日、中津江小の平和授業では、叔父オレグと母親ニーナさんを亡くした『のぞみ21』のナターシャさんの孫、5才のナターリヤを紹介しました。子どもたちが励ましたたよりを書きナターリヤに届けました。そしてニーナさん募金に協力したみなさんの思いも。いつまでも悲しみの消えない家族の心の癒しに少しでもなればと思いました。『のぞみ』への支援と共に、ナターリヤの成長も見つめ続けていかなければと思いました。

多くの収穫はありましたが、今後につなげなければ本当の収穫にはなりません。チェルノブイリの悲劇を次の世代に伝えるためにも、日本とベラルーシとの交流をさらに深める努力を続けていきたいと思います。

2005年夏のチェルノブイリ調査隊 思い出深いシーンの数々

日本人にとって、身近とは言えない国、ベラルーシ。

かく言う私も、チェルノブイリという問題がなかったら、ずっとその国名を知らないまま過ごしていたのかもしれない。だが、ベラルーシという国を訪れる度に、思い出深い風景を私たちに与えてくれる。

確かにチェルノブイリをきっかけに知ったベラルーシだけど、もっと豊かな文化的な交流だってできるはずなのに。私はいつもそんな想いを抱いてしまう。

ベラルーシをもっと身近に……。チェルノブイリへの支援を続けるなかで、いつしかそうしたテーマが私のなかで芽生えるようになっていたが、このページではそうした風景の数々をお伝えしたい。

(チェルノブイリ支援運動・九州 代表 矢野宏和)



快走！雪だるま2号 ついに購入されました



ついに走り出した雪だるま2号



日本のチェルノブイリ支援団体は横のつながりに欠けるという指摘が多い中で、唯一、各団体のつながりを作る足がかりとなっているのが、移動検診車「雪だるま号」ではないだろうか。甲状腺の検診での利用はもちろんのこと、ベラルーシを訪れる様々な団体が雪だるま号でベラルーシ国内を移動している。

「雪だるま1号」が30万キロの走行の末に廃車になって以降、購入資金を集めるためのキャンペーンを繰り返し、昨年の夏には「今回ようやく

購入され実現が叶った『雪だるま2号』。」と、思いきや、ベラルーシ政府は、300万円の車の購入に際して150万円の税金をかけてくるという、信じがたい状況が生じた。

「日本の市民が寄せてくださったカンパを、そのような税金の支払いに使うことはできません」と伝えて、何ともやり切れない想いを胸に、帰国してからはや一年。

その後、医療通訳の山田英雄さんは粘り強くベラルーシ赤十字と交渉を続け、ベラルーシ赤十字も政府に「雪だるま2号」の意義を伝え続け、チェルノブイリ支援運動・九州は150万円の税金を支払うことなく「雪だるま2号」はベラルーシ赤十字に寄贈されることになった。

今回の調査隊はこの「雪だるま2号」に乗車してベラルーシの大地を快走。これからも、ベラルーシと日本をつなぐ重要な移動手段として、活躍していくことになる。カンパ、ご協力をお寄せ頂いた皆様に、心から感謝の念を捧げたいと思います。ベラルーシを訪れる際は、是非、チェルノブイリ支援運動・九州までご連絡ください。

グルシュコビッチ村で「アレクセイと泉」を観る



パソコンの画面の映像に見入るチュプチュクたち

窓を開ければそこに「アレクセイと泉」の映像と同様に美しい自然があり、また同様の生活があるにも関わらず、グルシュコビッチ村のチュプチュクたちは、その画面の風景に見入り、アレクセイが語る言葉に深く頷いていた。あの映画に込められたメッセージほど、今日の地球の状況を端的に表現しえるものはなく、だから見終わった後に抱く残像には地球共通なものがあると思う。一方でまた、チェルノブイリの被害を直接受けた国ならではの印象というものもあるだろう。いずれ、聞いてみたい。

チェルノブイリ原発事故の被災者支援を通して、その大地に生きる人々と触れるなかで、いつもその姿に芸術的な力を感じていた私は、「ナガサキ、ヒロシマと同様にチェルノブイリはもう文学や芸術のテーマになりつつある」という小山さんの言葉に同感する。

そして、チェルノブイリというテーマを文学や芸術の領域まで昇華させた作品が、映画「アレクセイと泉」だと思う。

それが、日本人である私の思い込みではなかったということ、を、「アレクセイと泉」をベラルーシのグルシュコビッチ村の家庭で観たことで実感することができた。

甲状腺ガンセンターに貴重な縫合糸の贈呈



くる場所であるため、プレストでのチェルノブイリ支援運動・九州による甲状腺検診についても知っていた。特にこちらからプレストでの検診について説明したわけではないのだが、その取り組み対して、高い評価してくれており、感謝の言葉まで頂いた。

ベラルーシ国内におけるすべての甲状腺ガンの手術が行われている国立甲状腺ガンセンターにて、所長のデメチク氏の息子ユーリヤ医師に縫合糸を贈呈する。将来、この場所で、日本の医師による手術ができるようになればいいなと思いつつ、プレゼントとして持っていった日本の高品質な縫合糸は大変喜ばれた。ベラルーシでは今もこうした基本的な医療物資が不足しているようだ。

この甲状腺ガンセンターは、ベラルーシの甲状腺医療についての中心であり、各地方の取り組みについての情報も集まっ

チェルノブイリ支援・有機栽培水出し珈琲パック 森のしずく 940yen

「森のしずく」のベースになっているメキシコの有機栽培コーヒーは、樹木や果樹とともに栽培する森林農業により育まれています。ブラジルで最上級の評価を得ているジャカラング農場の有機栽培コーヒーをブレンドし、豊かな森と大地で育まれたマイルドな風味に仕上げました。水だしコーヒーならではのソフトな味わいをお楽しみください。

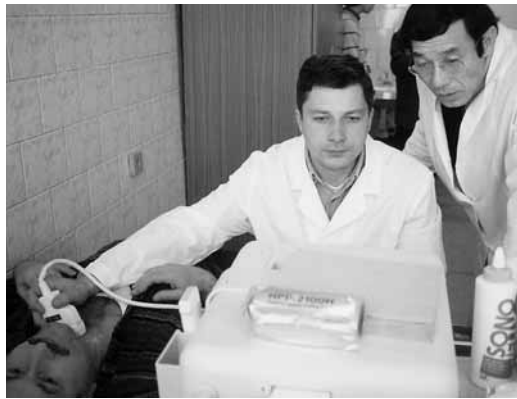


ベラルーシでの甲状腺ガンの検診活動を通して見える

甲状腺ガンをめぐるベラルーシの現状



共同で検診に取り組むベラルーシと日本の医師たち



1986年、ウクライナ北部のチェルノブイリ原発で史上最悪と言われる爆発事故が発生した。事故直後、現地でどんな被害が起きているかについてほとんど情報がなかったが、90年代半ばに入ると、小児甲状腺ガンの急増が報告され始め、次第に現地の様子が明らかになってきた。子ども用手術器具、エコー、顕微鏡など精密医療機器や医薬品の不足、医療技術の遅れ、首都ミンスクの中央基幹病院と地方病院との医療技術の格差、旧ソ連時代からの医療機関の縦割り制度、連携の悪さ、誤診……。日本の10年、20年前の医学知識や術法で診断、手術された患者の中には、声帯を傷つけてしまい声が出なくなった話や、誤診が元でガンでない正常な甲状腺を摘出してしまった例、発見が遅れてガン細胞の転移が進み命を落とす例なども報告されていた。長引く経済混乱も加わり、甲状腺ガンをめぐる状況は最悪と言えるものだった。

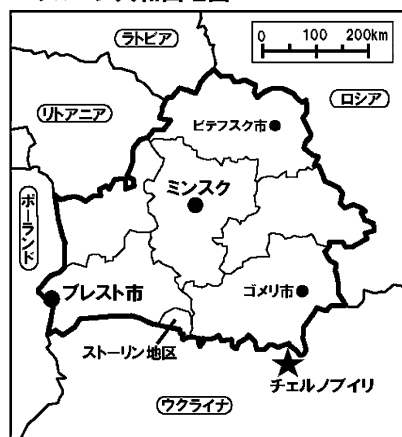
1990年代半ば、チェルノブイリ支援運動・九州に転機が訪れる。広島で放射能と甲状腺とを長く見続けてきた第一線の専門家たちから、チェルノブイリ被災者への医療支援を模索しているという連絡が入る。先に入っていたウクライナ側汚染地での取り組みを元に、甲状腺ガンの早期診断・治療のための検診システムを作れないかと模索しているという相談だった。

現地事情に通じ、何よりも熱意と意欲に燃える専門家グループとの出会いが発端となり、支援運動・九州は1997年から医療支援に本格的に取り組み始める。現地の専門家育成を視野に入れて、日本と現地の医師たちによる共同チームを組み、甲状腺ガン検診を中心とした医療支援活動が開始した。

それから9年。多くの方の善意に支えられ、支援運動・九州はのべ13回の検診団派遣を行った。なぜ「甲状腺ガン」なのか？ベラルーシの甲状腺ガンに関わる状況はどのように変化しているか？検診を続ける中で明らかになったデータをもとに、19年目のチェルノブイリをお伝えする。

◆最大の被爆国、ベラルーシ

ベラルーシ共和国地図



チェルノブイリ原発事故によって最大の被爆国となったのは、ウクライナの北に隣接していたベラルーシ共和国である。日本の半分強の土地に、1000万人余りの人々が暮らすベラルーシ

には、事故で放出された放射能の約70%が降り注いだ。国土の3分の2が高濃度から低濃度の汚染地となり、チェルノブイリに最も近いベラルーシ南東部のゴメリ州、西部のブレスト州、東部のモギリョフ州の3州は「汚染州」に指定された。多くの人びとが村から強制移住させられ、何十もの村が建物と表土ごと解体され、地図上から名前を消した。

旧ソ連政府の公式発表では、事故直後の避難住民は13万5000人、高濃度汚染地域住民は約400万人とされる。事故後、推定1000人も原発作業員と消防士が、事故処理にあたった。事故直後、高濃度の放射能の中消火活動にあたり、急性放射能障害で亡くなった31人の消防士は、遺体となつてからも放射能を放出しているため鉛の棺に収められた。彼らの眠るモスクワ郊外のミチノ墓地には、いつも献花が絶えない。

◆事故のあとで急増

放射性ヨウ素による甲状腺ガン

事故で大気中に放出された放射能のうち、特にセシウム1

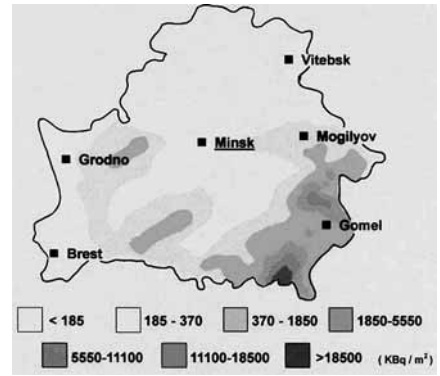


図1. 放射性ヨウ素の汚染地図

37と放射性ヨウ素(ヨウ素131)は、人間の体に影響を与える危険性が高い。図1は、放射性ヨウ素の汚染地図である。この放射性ヨウ素は、甲状腺に局所的に集まり、甲状腺ガンの原因となる。

甲状腺は、チヨウチヨが両羽を広げたような形をしたのどの部分にある器官で、身体の発育や成長、生殖、新陳代謝や自律神経をコントロールするホルモンを作るといふ、生命活動に欠かせない重要な役割を持つ。

内陸国であるベラルーシは、元々海藻や海産物を食べる機会が少ないため、天然のヨウ素が不足しがちな風土だった。ヨウ素が不足していた土地に、原発事故によって大量に放出された放射性ヨウ素が入ってきたため、甲状腺はそれを吸収し、やがて良性や悪性の腫瘍など甲状腺異常が多発することになった。

空気中からの外部被曝と、食物を通し

て摂取される放射性物質による内部被曝の両方によって、ベラルーシの多くの人々が長く健康被害に苦しむことになった。

◆被害はまず子どもたちへ 小児甲状腺ガンの急増

成長期にある子どもは、特にヨウ素を吸収しやすい。子どもたちの間で甲状腺ガンの増加が報告され始めたのは、やっと1990年代に入ってからだった。

図2は、事故後の小児甲状腺ガンの発生率を示したものである。通常小児甲状腺ガンは非常に珍しい病気だと言われるが、グラフの10万人あたりの発生率がいかに高いかが分かる。発生地域は、やはり汚染州であるゴメリ州、ブレスト州に集中している。

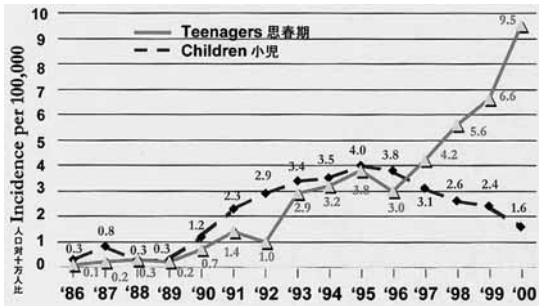


図2. 小児・思春期甲状腺ガンの発生率

グラフでは、小児甲状腺ガンの発生率は、1996年をピークに減少しつつある。しかしその一方で、新たに増加傾向にあるグラフがある。思春期(13歳~19歳)における甲状腺ガンの発生率である。事故から時間が経過するとともに、ガンの発生する年齢も上がりつつある現状がある。

図3は、小児・思春期の甲状腺ガン患者が、事故当時何歳だったかを分析したものである。何歳で被曝し甲状腺ガンにかかったのかを見ると、事故当時1~6歳だった世代に全体の患者数の約半数以上が集中していることが分かる。この年齢層は、これからも遅れて甲状腺ガンになるリスクが高く、今後もケアが必要であるとされている。

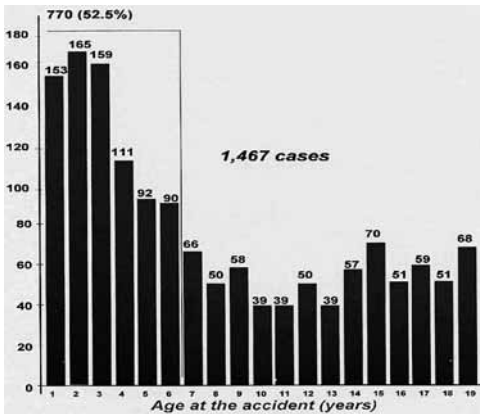


図3. 甲状腺ガン患者の事故当時の年齢

事故当時1~6歳だった世代は現在20

25歳で、結婚して親となる年齢を迎えている。特に女性は、結婚と出産によって母体の甲状腺に大きな負担がかかると言われていた。今のところ子どもへの影響は報告されていないが、それでもまだ影響は起きないと断言することはできない。

事故当時に「青年」だった世代は、間もなくガン年齢に入る。その次は、当時「子ども」だった世代がガン年齢になる。現在ベラルーシには、事故直後に世界中のジャーナリズムが報道したような衝撃的な悲劇はない。しかしチェルノブイリは確実に人びとの生活の上に影を落とし、時間の経過と共に複雑化しながら、今もその負の影響は終わっていない。

◆ストーリーン地区での 甲状腺ガン検診

事故による被災者の多くは農村部に住む。汚染地帯が余りに広いため、多くの人びとは低濃度汚染地に暮らすほかに、遅れて健康被害が出ることも少ない。

本格的な医療支援の可能性について、現地と日本の医療専門家、支援運動・九州とで話し合う中で、甲状腺ガンの早期発見、治療による診断システム確立というプロジェクト案が見えてきた。日本の専門家とベラルーシ側の首都ミンスクの基幹病院と被災者の多い地方病院の専門家とで共同でチームを組み、年に二度の

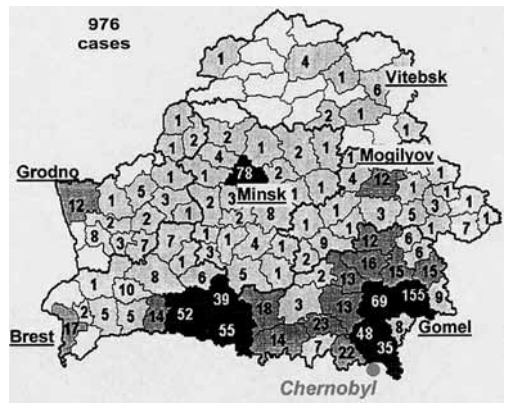


図4. 小児甲状腺ガンの地区ごとの症例数

甲状腺ガン検診を実施するというものがある。

図4は、2000年までの小児甲状腺ガンの地区ごとの症例数である。南部のゴメリ州とブレスト州に特に多い。首都ミンスクの数字が高いのは、汚染地から移転した人が多くいるためである。

事故直後から各国NGOや人道支援が入っていたゴメリ州に対し、ブレスト州では取り組みが遅れていた。そのため、チェルノブイリ支援運動・九州が甲状腺ガン検診を開始する際、まずはブレスト州を対象にすることを決め、中でも特に甲状腺ガン発生率の高かった南東部のストーリーリン地区(図4に「55」とある地区)を最初の検診拠点に選んだ。

1997年〜2001年までの5年間、ストーリーリン地区で甲状腺ガン検診を

実施した後、2002年からは、州都ブレスト市にあるブレスト州立内分泌診療所に拠点を移し、現在まで検診を行っている。

◆ 現地と二人三脚での被災者支援

図5は、現在の甲状腺ガン合同検診チームの構成を示したものである。日本の第一線で活躍する専門家が、ミンスクの基幹病院、汚染地の病院とが、甲状腺ガンを早期発見、早期治療を行えるよう、一丸となって取り組んでいる。

ブレスト州立内分泌診療所は、州内のすべての内分泌系疾患の情報が集まる場

所である。さらにこの診療所のスタッフは、国際赤十字が汚染州で行っている移動検診プロジェクトのスタッフでもある。州立内分泌診療所での検診のほか、休診日などを利用して、ブレスト州中を回り、年間1万5000人も患者を診察している。チェルノブイリ通信でも度々紹介している、アルツール医師たちである。

国際赤十字移動検診チームの「一次検診」でガンの疑いがあると診断された患者に対し、チェルノブイリ支援運動・九州が派遣した日本と現地中央病院の専門家による共同チーム訪問にあわせ、「二次検診」を行う。これによって、甲状腺



図5. 移動検診合同チーム相関図

※ベラルーシには医師となって医療の現場に出た医師が、一度医学再教育センターへ戻り研修を受ける制度がある。

ガンの発見率はぐんと高まった。支援運動からの検診団派遣の際、50〜80名という診察数で、2〜3件という高い甲状腺ガン発見率なのは、一次検診でしぼられた患者に対し、日本から派遣した専門家と現地の医師とでより正確な診断を行うためである。

甲状腺ガンは幸い進行が遅く、早期に発見し適切な治療さえ行えば転移の可能性が低くなる。一方、甲状腺を取り除くと、人間の体は自分の力でホルモンを作ることができなくなる。患者は、残る人生の長い間、ずっと外部からホルモン剤を摂取しなければならぬ。一箱3〜5ドルというホルモン代の負担は、現地の人々には小さくない。一生のホルモン剤購入の負担や身体への影響を考えた場合、切らずに済むのなら当然切らない方がよい。悪性腫瘍かそうでないか、切除せずに済むのかどうかなど甲状腺疾患については正確な診断が必要になる。しかしベラルーシでは「疑わしきは切除」という方針が取られ、甲状腺ガンについても大雑把な診断と手術が行われていた。

誤診と不要な手術を少しでも減らすために、必要とされるのが、吸引穿刺による細胞診である。エコーを見ながら、狙った甲状腺の部位から細胞を取り出すこと、取り出した細胞を見て甲状腺はどんな状態なのか、どんな治療が必要なのかを正確に判断すること。この吸引穿刺

による細胞診が、現地医師だけでできるようになっていくことは、このプロジェクトの大事なねらいの一つである。

■ チェルノブイリ 20周年を前に

日本の多くの方々に支えられて、チェルノブイリ支援運動・九州の取り組みは15年目に入った。現地では、検診に参加し日本の専門家から研修を受けた医師が、また新たな現地の医師を育てていくという段階に入っている。ベラルーシ国内の政治状況は難しいものもあるが、現地関係者との信頼関係も深まり、当初プロジェクトが目指していた到達点が、やっと見えてきた。

事務局スタッフとしてベラルーシを訪問する度に、現地の医療機関や医師たちから、何度も感謝の言葉を受ける機会がある。検診を受けた患者さんや現地医師



今も深刻な問題を引き起こす
チェルノブイリ原発

から、日本の支援者ひとりひとりに向けられた「スパシーバ・バリシヨエ（本当にありがとう）」の言葉を、改めて皆さんへとお伝えしたい。

「時は二つに分けられる。1986年4月26日の前と後に」。

これは、チェルノブイリ支援運動・九州が95年に刊行した作文集『私たちの涙で雪だるまが溶けた〜子どもたちのチェルノブイリ〜』に、ベラルーシの少女が寄せた言葉である。彼女が伝えようとしたこの言葉の意味を考える時、現地で出会った、チェルノブイリによって困難な状況にある多くの方たちの顔が思い浮かぶ。

チェルノブイリ支援運動・九州の支援者は、年々わずかずつだが減り続けている。現在では年に二度の検診を一度に減らし、内容をより充実させ質を高めることに全力を上げている。各国NGOや研究機関による支援が次々と撤退し、現地政府によるチェルノブイリ予算も減る傾向にある中で、日本からの人道支援に対し、被災者からも多くの期待が寄せられている。各国支援が撤退する現在だからこそ、もうしばらくの間、日本の皆さんとともに現地支援を続けていけたらと思う。

どうか一人でも多くの方々が、チェルノブイリの被災者の方へ引き続き手をさしのべて下さるよう、心からお願ひ申し上げます。

事故からもうすぐ20年 忘れちゃならないチェルノブイリ基礎知識

第2回【チェルノブイリ事故の放射能による人々への被害】

爆発事故後、チェルノブイリ原発周辺では多くの方が重い火傷や脱毛、発疹などに悩まされた。また白血球の減少や下痢、めまい、吐き気、脱力感などの症状があらわれた。これらは急性障害とよばれ、強い放射線を短期にあびたとき、数日後から数ヶ月の間に生じる被害である。

放射能による被害にはこの急性障害と、比較的低いレベルの放射能をあびた場合で、被曝してから発生まで時間を要する晩発性障害とがある。晩発性障害として特に問題となったもののひとつがヨウ素131という放射能による被曝である。チェルノブイリ原発事故により大量に放出されたヨウ素131は、空気と食物をとおして多くの人の体内に入り、甲状腺に取り込まれた。甲状腺は体が成長するのに必要なホルモンを作り出す器官で、天然のヨウ素を必要とするが、生物は放射性的のヨウ素も栄養分と思い込み、体内に取り込んでしまった。子どもの甲状腺は大人のものよりも小さいため、同量の放射能を取り込んでも被曝量が多くなってしまふ。甲状腺に取り込まれたヨウ素131は、甲状腺のガンや機能障害を起こす。チェルノブイリの場合は、事故後4年目から小児甲状腺ガンが急増していった。その他にも、貧血、運動機能の低下、免疫機能の低下などが報告された。また、晩発性障害には遺伝的影響も懸念され、放射能が胎児に影響を与え、知的障害や新生児の死亡などもたらされた。晩発性障害は発生まで時間がかかるため、被曝との因果関係の証明が難しい。そのため、多くの被災者が健康被害を訴えても因果関係がはっきりしないのをいいことに切り捨てられてしまっているという。



甲状腺ガンの早期発見に取り組む医師たち

特別寄稿 ベラルーシに暮らして 第1回

在ベラルーシ日本大使館 大使 森野 善郎

(注記) 本文寄稿に際しお断りをします。本寄稿文は、私の個人的な立場から寄稿した文章ですので、本寄稿文の内容を私の外交活動と直接結びつけてお考えにならないようお願い申し上げます。

私が、ベラルーシに転勤して参りました。

たのは平成16年3月25日です。フランクフルト経由で参りましたので、ミンスク空港に到着した時の印象は余りパツとしたものではありませんでした。しかし、30余年前に当時まだ社会主義国でした

ポーランドに留学した際味わった時の印象と良く似たものでしたので久し振りに社会主義国へ帰って来たという一種のノスタルジアを感じました。また、ベラルーシ人はポーランド人と同じスラブ民族ですし、つい最近まで同じ社会主義社会に生まれ、育った国民ですので、人々の醸し出す雰囲気には変わりがありませんでしたから、いち早くこの国に慣れ、親しむことができました。

今皆様が関心を寄せていらつしゃるチェルノブイリ原発事故の件を一つとつても、何故かくも多くの人々が真相を長く知らされず、悲惨な目に合わされ続けなくてはならないのか？本当にその責任をとらされなくてはならなかった関係者の家族が、圧倒的に多くの犠牲者を尻目に問題の無い土地に逃れ得たという社会体制に私は心からの憤りを今も禁じ得ませんし、依然としてそのような社会が存続していることに一種の恐怖感さえ感じ

ます。

最初に恨みつばいことを書きましたが以上をして私がここでしつかりとした仕事をしようとする勇気を与えてくれた大きな原点となっていますし、また、励みともなっています。

口には出さなくても（出せない）彼等の表情を見ていれば、真実はどこにあるのか一目瞭然です。口に出せない苦しさを心の奥に抱き続けなくてはならない人々の為に私は少しでも役に立ちたいと日頃思い続けています。我々が通常当たり前のように享受している選択の自由、生活水準の高さ、言論、政治的自由等がままならない状況に置かれている現地の人々を直視するにつけ、彼等にも一回限りの人生の中で我々に与えられたと同じ幸せを与えられるように、いかにすれば励まし、勇気づけることが出来るのかという問いが私の心の中から一時も消え去るようなことは、ここ現地にいる限り無いでしょう。我々が知っておかなければならないことは、かつてロシアに国旗を翻したことのあるポーランド、チェコ、スロバキア、ハンガリーや無理矢理ソ連邦に編入されてしまったバルト三国とベラルーシを比較する場合、ロシアに対す

る認識や国民感情がかなり大きく違っていることです。1980年末から1990年初頭にかけ何故ソ連型社会が崩壊したのかは、簡単に言ってしまうえば我々が住んでいる社会のほうもつと人間的に価値がある社会であったために人間的に問題のあった社会が負けたのではないのでしょうか。

ベラルーシという国の歴史は、日本の歴史とは違って不幸続きの連続ではなかったでしょうか？いつもよその国に制圧されてきた歴史を辿ってきました。この国の近代史では、第一次世界大戦直後ほんのつかの間の独立国家としての誕生、そして間もなくロシア共産主義勢力圏に飲み込まれてしまいました。最近では、1990年のソ連邦崩壊を受けて晴れて自由な国家としての地位を得ますが、僅か4年後には再び旧ソ連型社会に逆戻りしてしまい、自由民主主義社会誕生の夢を断たれてしまいます。彼等には神も仏も無いのかと言いたいほど本当に気の毒というしかありません。この国の運命故なのでしょうが？

首都ミンスクの生活は、東京の生活に比べれば、流れゆくテンポが余りにもゆっくりしていて私のようなせっかちな



ベラルーシの町並み

性格の人間には気の狂いそうな時間の過ごし方となります。一方、市内にあるロシア語を専らとする劇場での演劇とベラルーシ語を専らとする劇場での演劇では、演劇の質の高さと俳優たちの演技力の豊かさに魅せられて外国語が判らない私にも最高の娯楽場所となっています。それ故にこの二つの劇場は常に地元の人々で賑わっていますし、私はそういった一般庶民の様子を垣間見ることも劇の鑑賞以外の楽しみにしています。劇が跳ねた後、知り合いになった劇場支配人さんと酒を酌み交わしながらの演劇談義もとても良い夜の楽しみですし、また、近

所のレストラン・バーで一緒に観劇に行った仲間と一杯ひっかけから家路につくのもなかなかおつなものです。

ミンスクの表通りは、壁への落書きも少なく(そんなことをしたら後が大変なこととなることを若者達は十分すぎるほど知っている)、清潔ですが何となく人為的で自然さを感じません。旧ソ連時代に建てられたアパート群が市内にひしめき合っています。4、5階建ての見窄らしいアパート群を地元の住民は「フルフチョフ・アパート」と言って比喩しています。日本でしたらほんのちよつとした地震でも崩壊しそうな安普請の建物です。建物の内部はお化け屋敷のようで、不潔で、薄暗く、しもた屋といった風情です。社会主義社会では、質の社会より量の社会を重視した実例です。

一方、今ミンスクでは、新しいモダンなアパートの建設も盛んですが、一平方メートル当たり800ドルから1200ドルの値段となっています。日本とは違いこの価格は部屋に何も無い状態の価格です。ここに風呂場を作ったり、台所を設置したり、内装をしたりすれば、アパート価格はもつと跳ね上がります。

この国の一人当たり労働者の平均賃金

は、本年末に250ドルとすると政府は意気込んでいますが、一件の新築アパートを購入するにはどれ程の借金が必要か考えてみて下さい。また、レストランでの外食も決して安くはありません。ミンスクの中央通りにある日本風レストランでちよつとした寿司を食べながら、ビールを飲めば最低でも日本円にして5000円以上は取られます。私が今年6月東京に帰って、銀座の真ん中で食した寿司でもそんなに高くはありませんでしたし、味は天国と地獄ほど違っていました。この国は社会主義的経済体制をとっていますので、男女の賃金に大きな格差はありませんが、これが若い労働者層には人気がありません。ちよつとした若者でしたらポーランド、ドイツ、英国といった自由経済主義をとっている国へ働きにでます。ですので若者を中心に日本で言うフリーターが圧倒的に多いのではないかと想像しますが、この国の政府統計局発表の公式失業者数は圧倒的な低さを見せていますし、低いインフラ率もどこまで信用して良いのか判断に迷います。勿論若い女性のおしゃれ思考は世界共通していますが、特にこの国の若い女性

性は身の回りのファッションにはかなり



ベラルーシの豊かな自然

の神経を使っているようですので、この費用を捻出するのも彼女たちの知恵の見せ所となっています。ベラルーシは、気の毒なことに第二次世界大戦では、ドイツとロシアの双方から徹底的な破壊を被った結果、歴史的な財産が殆ど破壊尽くされてしまったお陰で、日本人のように歴史的な財産に興味を寄せる外国人にとっては、ミンスクでさえこの様な楽しさを感じさせる場所が少なく、殺風景と言っしかありません。ただそのような風景の中で社会主義社会でも手の加えようがなかった自然の姿、形にはそれなりに心打たれるものが多く目に入り、心慰めてくれます。

第5回 ベラルーシについて学んでみよう

チエルノブイリ支援運動・九州 運営委員・ロシア語通訳

山口 英文

イワン雷帝、亡き後は…

前回は今も毀誉褒貶の混ざるイワン雷帝についてだけに絞って述べました。イワン雷帝によってロシアが東ヨーロッパの強国として成立したと同時にロシアには敵が現われます。移動検診で我々が訪れるプレスとポーランドです。ポーランドはカトリック国として正教のロシアとこれからも長い対立と交流の歴史を重ねて行きます。さらに北からはスウェーデン王国がバルト海を下って度々ロシアの大地に攻め込んできます。イワン雷帝亡き後は息子のヒョードルが継ぎます。しかし彼には子供が無く皇位継承者である弟のドミトリーが変死を遂げます。重臣であったボリス・ゴドノフというモシゴル系貴族が摂政から皇位を占めます。オペラにも謳われたボリス・ゴドノフの登場です。彼は優れた政治家としてイワン雷帝亡き後のロシアで西欧との交流、税役、軍役の軽減などを行い大学まで創設しようとしています。が志半ばで急死します。急死と同時に変死した前の皇帝の弟が実は生きていたと名乗る自称ドミトリーとい

う貴族の出身者が、皇位を取り返しますが彼はポーランド貴族の娘を妻に迎え、ポーランドの後押しを受けカトリック教会の勢力をロシアに広めようとします。これに反発した貴族の代表ワシーリー・シユイスキーを初めとする貴族と農民が反乱を起こし彼を倒しシユイスキーが皇位につきませんが、彼も農民への圧政が原因で貧農を中心とする勢力にコサツクが加わってポロトニコフの反乱という農民一揆がおこり、シユイスキーはこの制圧に苦戦し、追い討ちをかけるようにまた自称ドミトリーがコサツクの中から名乗り出てきたもやポーランド王の助力を得てシユイスキーを追放し、シユイスキーは修道士にさせられます。

そこに今度はスウェーデン王がポーランド勢力からロシアを解放するという口実で自分の息子を空位のロシア皇帝にしようとして侵入してきますが、ノブゴロド（モスクワの北）の肉屋のミーニンとポジャルスキー公という貴族がロシア正教会と協力して貴族・農民・コサツク・モスクワの商人等を組織して外国勢力を追い払い、5000人からなる聖職者・貴族・地主・農民の全国会議を開き、1613年に故イワン雷帝の妻の実家の出身者であるミハイル・ロマノフをロシア皇帝（ツァーリ）として選出しました。このミハイル・ロマノフが大津事件・日露戦争・ロシア革命で日本にも馴染み深い、ロシア最後の皇帝ニコライ二世のロマノフ王朝の直接の先祖となったのです。

このロマノフ王朝からロシアは今までの内乱からいよいよヨーロッパ諸国にも東の強国として大きな影響を与え始めます。ベラルーシはこの動乱の間、ポーランド、ロシアの戦いの場となりベラルーシの多くの農民は正教徒としてロシアの一部として自分の大地を守る戦いに出ていたのです。ベラルーシの歴史は戦争続きですが、ベラルーシ人が諸外国を侵略した事は皆無という事がここでも証明されています。

このロマノフ王朝が出来るまでロシアは意外にも度々民意で皇帝が選ばれるという経験を経ています。ロシア皇帝というのは強権政府ではなくロシアの大地の香りがする、ロシア一家の親父的な親しみがロシアの人々にも流れ、いまま帝政ロシアを愛する人々が教会や次に述べるような人々の間に根強く居るようです。

さて、コサツクという言葉が出ています。このコサツクはコサツクダンス、年配の方ならコサツク騎兵等と言う言葉がお馴染みでしょう。コサツクはもともとトルコ語の乱暴者という意味から生まれた言葉です。彼等は農奴制度を嫌って皇帝直轄領、あるいは辺境の自由地に集まった元農民です。正教を信仰し誰にも支配されない自治権を



チェルノブイリ支援運動・活動報告

伝えていきたいチェルノブイリの現実、ベラルーシの文化

石峯中学での出張授業

報告／寺嶋 悠（運営委員）

7月8日、北九州市立石峯中学校（北九州市若松区）の総合的な学習の時間の中で、チェルノブイリについて学ぶ授業を行った。

石峯中は、数年前から国際理解や平和教育の一環として、毎年一度、チェルノブイリの授業を設けて下さっている。橋渡しをして下さったのは、支援運動の会員であり、石峯中で英語を教えられている貞池先生である。

授業ではベラルーシの人びとの暮らしや自然、事故や医療支援についてできるだけ分かりやすく話した。最初、生徒会役員の女子生徒にグルシニコピッチ村の民族衣装を着てもらい、それぞれがロシア語での自己紹介。シルクのブラウスに、にぎやかな刺繍の入ったベスト、青と赤のスカートといった初めて見る衣装に、みんなの視線が



石峯中学での出張授業

集まる。

NGOってなんのこと？ベラルーシってどんな国？どんな人たちが住んでいるの？・・・スクリーンにたくさんさんの写真を写し出しながら話を進めた。途中「チェルノブイリって知ってますか？」と尋ねると、回りの様子をうかがいながら、ぼつりぼつりと手が挙がる。事故のこと、皆さんと同じ世代の人たちの間で広がった甲状腺ガンのこと、支援運動が取り組む医療支援活動を紹介した。

授業の終わりに、女子生徒から「私たちにできることは何ですか？」と質問が出た。「これだ！というはつきりとした答えはない。ただあなたが今日聞いたことを家族や友達に話す、そうするとみんなが関心を持ち始める。写真展やバザーを開いたり、募金をすることもあるけど、最初の一步はまず若い皆さんが関心を持って伝えて下さること」。ちょっと考えてから私はそう結び、約1時間の授業を無事終えた。

石峯中からはその後、ロシア民謡を歌ったテープやビデオメッセージ、折鶴などが事務局へと届いた。今年夏現地へ届け、返信のビデオメッセージも持ち帰った。

校長の宮崎良孝先生は、生徒には学校の授業以外にもさまざまなことを学び経験してほしいと話された。秋の文化祭では「のぞみ21」のバザーも企画されているとのこと。事故後に生まれた世代にチェルノブイリを語りついでいく大切さも感じた。こういった授業や顔の見える交流が、生徒一人ひとりの心に「学校だけでは学べないもの」を残してくれることを願う。

チェルノブイリのたんぽぽ、朗読会

報告／小野 正則（運営委員）

7月31日の若松教会の日曜学校で「チェルノブイリのたんぽぽ」の朗読会にオルガニストの福田望さんで行って頂きました。その報告をします。報告というよりも反省になってしましますが・・・

「子供達にもっとチェルノブイリについて知ってほしい」先方様のその言葉から今回の読み聞かせが決まりました。当日は60人ぐらい人が集まり読み聞かせも無事に終わり少しですがみなさんとお話する時間を頂いたのですが・・・

読み聞かせは何度も練習をして自分でもうまくなったと思います。でも始めのテーマである「子ども達にもっとチェルノブイリを知ってほしい」というコンセプトはうまく伝わったのでしょうか？今でも自分自身に疑問を感じてしまいます。

僕は普段でも色々な場所で読み聞かせをしています。もちろん「チェルノブイリのたんぽぽ」もときどき子供達に読むのですが、そこでも子ども達への伝わりかたはやはり「物語の世界の出来事」なんです・・・



物語を読み聞かせる小野さん

子ども達にチェルノブイリについて説明するのは大人相手とは勝手がちがいます。僕自身ももう少し絵本と連動してうまく「チェルノブイリ」について話すことができれば「子ども達にもっとチェルノブイリについて知ってもらえる」じゃないかと思えます。僕がこれからもこの活動していくうえでの課題ですね。今回の朗読会は反省だらけでしたが次に「何をやるか」を見付けられた大事な朗読会になりました。

マトリョーシカ絵付けワークショップ

報告／三島さとこ（事務局スタッフ）



素晴らしい作品の数々

付け中は真剣そのもので、でも時たま、あちらこちらから「何でベラルーシの人たちはこんなに上手に描けるの？本当に上手いね。」という感心の声聞こえていました。みなさん、5番目の一番小さいマトリョーシカ（身長約4センチ）の絵付けに苦戦されているようでした。

出来上がったマトリョーシカたちはどれも色鮮やかで、なかには色えんぴつを使用した方や折り紙をはりつけて着物の帯にされていた方もいて、それぞれ個性的なマトリョーシカが出来上がりました。参加された方々からも「楽しかった！」「なかなかないイベントだから参加できて良かった」というコメントをいただくことができました。



まずは下絵。「のぞみ21」でつくられたマトリョーシカや各々で持ってきた写真などをお手本にしながら、無地のマトリョーシカに表情がつけられていきました。絵



ナターシャさんのベラルーシ料理教室

報告／吉本 美貴（事務局長）



気あいあいとした雰囲気でした。最初はナターシャさんのレシピに沿って作り始めたものの、最後は思い思いの味付けの創作料理の出来上がり。これではベラルーシ料理とはいえないのでは？とお思いかもありませんが、これでいいのです。私がナターシャさんにレシピを聞いたとき、ナターシャさんは言っていました。「料理に決まりはないので好きなように作ってくださいね。」と。そしてナターシャさんの料理の1番いいところは、食べた人が幸せな気分になれること。当日、みんなの笑顔を見て、ちゃんとナターシャさんの味と温かさを再現できたな、と感じました。

ゴメリにあるナターシャさん、ステパンさんご夫妻のお宅は、けっして広いとか豪華とはいえないけれども、お二人の丁寧な暮らしぶりがわかる手入れが行き届いたお部屋。そこで食べたナターシャさんの料理は、とてもおいしかった。遠くベラルーシにいなながらも、心温まるような、ほっとするような、そんな味。その料理を、私たちだけの間に留めておくのはもったいない。みんなにも味わってもらえたら。そして、料理を通してナターシャさんたちのことをもっと身近に感じてもらえたら・・・という思いから料理会をすることにしました。



こちらはナターシャさんのお料理

なお子さんからお父さんまで集まり、和

たくさん募金を ありがとうございました

(敬称略・順不同)

津田律子 市岡真理子 成富祐子 丸山和成 財津悠子 平島憬子 落合恵美 西浦ちえみ おはなし花いちもんめ 長谷川明子 則松和恵 桑原恭子 宮盛雅之 山内町子 桜木秩子 西原幸子 山下千賀 吉田久美子 チェルノブイリ子ども基金 高山幸子 久保山千俊 グリーンコープ生協ふくおか 谷尚子 宮田香子 福山田鶴子 井上洋子 小池昇 島田美恵子 田川星子 木下るみ 松尾博文 安岡繁子 村上和代 青木秀美 太田千賀子 守山美佐子 古野竹則 大久保良子 沼富美子 赤尾恭子 深水陽子 榎本みつ枝 サトウ矯正歯科クリニックス 川野都 大中百合 吉元京子 深堀ミチ子 西成辰雄 笹木小百合 林由実子 南祐子 林陽子 津田瑛子 宮本カズコ 丸山さより 筒井多賀子 川野久美 樋口裕子 アイランドツアーセンター 戸谷久美子 井原環 谷口礼子 山崎末吉 井上輝美 黒岩英子 本多直純・いずみ 中島美代子 大谷正穂 梶島一郎 秦賢志 上通りメンタルクリニック 林喜久子 山本裕子 橋口日出夫 身吉三枝子 清水一雄 大和溶接工業 高木博子 深江誠子 花田あさの 吉武崇子 庄籠道子 柴田みか 岡崎智子 牟田美幸 岸川美好 前田・中西・沖田中香代子 鳥原良子 丸山千絵 佐田映子 柿元里佳 伊藤利恵 辻信一 金子左代子 稗田慶子 野中孝子 堀晶子 稲吉清子 白田朗 小西功子

河上雅夫 白水明代 引田良子 鈴木弘子 福本智子 磯道綾子 力丸邦子 妹川征男 大園広子 佐藤照子 藤田一美 S.K.F (有) 河内博美・章子 古賀教子 岩下育男 須崎海里 貞池和恵 中村洋子 ポーイスカウト大分5団 島田まゆみ 種和子 田嶋美奈子 中島幸代 吉村美美 西出悦子 加藤えり子 寺野柊衣 桂由記子 中村順子 西井えりな チェルノブイリ友の会 じゃがいものおうち ふれあいハウストマト館 グリーンコープ生活協同組合おおいだ チェルノブイリ友の会伏尾台 澤田和子 宮西いづみ 朝谷貴子 筑豊互助会

(2005年6月1日～8月31日までに募金をして下さった方、ならびに、「のぞみ21」民芸品、チェルノブイリ支援コーヒー・紅茶の購入を通じて活動を支援して下さいました方です。通信にお名前を紹介することを許可いただいた方のみ掲載しています。)

募金内訳

3000円コース	424、000円 (142件)
5000円コース	214、000円 (43件)
10000円コース	280、000円 (26件)
「のぞみ21カンパ」	89、305円 (23件)
その他カンパ	385、863円 (86件)

(分割払いの方もいるので数字は割り切れません。)

合計1、393、168円

★チェルノブイリ調査団派遣には、「通販生活」読者の皆様より、甲状腺手術器具および細胞診用器具の購入費として202、147円のカンパをいただきました。

募金者からのメッセージ 一部抜粋

- 悲劇は二度とくり返されぬ様に●のぞみ21のナフキンは、シンプルな刺しゅうで、ふちがとでもきれいに縫ってあるのでびっくり。きつと心をこめてつくられたのでしよう。● 原発に頼らない社会を願っています。● 通信を読みながら何か自分にもと思うことです。● 厳しい現実の中でたくましく生きておられるベラルーシの皆様はこちらが励まされます。● いつもチェルノブイリの人たち、子どもたちのこと、忘れません。● 何か行動を！と思います。● 何か困難なので募金します。● 人事でないといつも心に刻みつけていきたい。平和とあれ！● 少しでも多くの人が心の傷を癒せますように。● 子供達が幸せになれます様祈ります。● お母さんになられたリユドミラさん、おめでとうございました。● (のぞみ21の) ステパンさん達の作品を少しでもこれから購入して手助けになればと思います。● 玄海原発プルサーマル計画、心配です!!● みんな幸になりますように。● ありがとうございます。● 少しばかりですが未永く続けていきたいです。● 忘れないための定期便です。● 雪だるま2号のことがうまくなりますように。● いつも活動お疲れ様です。● がんばって下さい。● 1人1人の小さな支援の種は皆に広がって、大きな意識に● 私にできるささやかな支援です。● がんばって活動をぜひ続けて下さい。● チェルノブイリ支援に参加できてお役に立てば嬉しいですね。● 心の伴った支援活動に感謝しております。● いつも通信ありがとうございます。● 息の長い活動に頭が下がります。● ナターリヤちゃんのすこやかな成長を願います。